

■新春評論■歌壇の若者たち

十代の短歌を読む — 平成二桁世代の台頭 — 田中拓也

ここ数年の間に「学生短歌」の状況がわりつつあるように感じている。

第一回高校生短歌大会（「短歌甲子園二〇〇六」）が若手県盛岡市で開催されたのは平成十八年。平成二十三年には宮崎県日向市で「牧水・短歌甲子園」が始まり、平成二十七年には富山県高岡市で「高校生万葉短歌バトル」が開催された。いずれも高校生を対象とした「参加型」の短歌大会であり、現地を訪れて「団体戦」や「個人戦」が行われる点が共通している。

平成二十七年には大学短歌連盟主催・角川文化振興財団後援による「大学短歌バトル二〇一五」が開催され、多くの大学短歌会が「歌合」形式の同大会に参加した。「大学短歌バトル二〇一五」の団体戦決勝戦は北海道大学短歌会と東北大学短歌会との対戦。出場した北海道大学短歌会の内藤瑳紀、東北大学短歌会の浅野大輝、工藤玲音、

布谷みずきはいずれも「短歌甲子園」で活躍したメンバーであった。さらに、「大学短歌バトル二〇一七」で優勝した岡山大学短歌会の川上まなみも「短歌甲子園」で活躍した一人である。これらの状況を踏まえてみると「学生短歌」の範疇には、大学生だけでなく高校生も徐々に入り始めているといっても差し支えないだろう。

・あの夏と呼ぶ夏になると悟りつつ教室の窓が光を通す
武田 穂佳
・特別になりたし紺の制服の下に真白のワンピース着る
（『短歌研究』二〇一六年九月号より）

第五十九回「短歌研究新人賞」を史上最年少の十八歳で受賞した武田穂佳（平成九年生）は若手県立盛岡第四高等学校在学中は文芸部に所属し、「短歌甲子園二〇一五」において団体戦優勝の成績をおさめている。掲出歌は新人賞受賞作「いつも明るい」

から抄出しているが、「等身大」の高校生活を詠んだ繊細な作品と思う。選考委員の穂村弘が「選後講評」で「普遍的な青春像」と指摘しているのも妥当といえるだろう。確かに、受賞作のみを見たときにはそうした評になると思う。しかし、武田の高校時代から最近の作品を通して読んだ時はどうだろう。

・新しく生まれたい夜
願いこめ
二十枚の爪すべてを磨く
（『短歌甲子園二〇一五』より）

・半分のゆでたまご差し出されたよう大宮
駅のきれいな便器
（『短歌研究』二〇一七年三月号より）
・宝箱開けるみたいな顔してら熱のわたしの部屋に来る君
（『角川短歌』二〇一七年九月号より）

高校三年生の時の「新しく…」は定型を